

# 西の湖および伊庭内湖におけるホンモロコ稚魚の生息状況

大植伸之・岡本晴夫

## 1. 目的

西の湖および伊庭内湖では、ホンモロコ資源が回復傾向にあり、両内湖で成育した稚魚が琵琶湖へ移動し、琵琶湖における漁獲にも貢献していることが分かっている。一方で釣り、タモすくい、投網などの遊漁が盛んになり、特に親魚の集中する流入河川では遊漁者が殺到し再生産への影響が懸念されるようになった。これを受けて、2017年から西の湖流入河川（山本川）、伊庭内湖流入河川（瓜生川および躰光寺川）において、ホンモロコの産卵保護のため4月と5月の規制区間における水産物の採捕が、内水面漁場管理委員会の指示により禁止となった。

この委員会指示の効果を評価するために西の湖および伊庭内湖(大同川を含む)内のホンモロコ稚魚の生息状況を調査した。

## 2. 方法

調査は、2020年4月27日から8月18日にかけて、それぞれ計9回行った。西の湖では6定点、伊庭内湖(大同川を含む)では8定点を設け、ビームトロール網(小型底曳き網)によりホンモロコ稚魚を採集した。採集した標本は氷冷して持ち帰り、ホンモロコ稚魚数を計数した。各地点の生息密度(尾/m<sup>2</sup>)を採集尾数(尾)/曳網面積(m<sup>2</sup>)として算出し、それらの平均値を各内湖の稚魚生息密度の指標とした。曳網面積はビームトロール網の間口(3m)×曳網距離(m)として算出した。

## 3. 結果

西の湖では5月12日の調査より稚魚が採捕され、推定生息密度(±標準誤差)は0.02±0.01尾/m<sup>2</sup>(5/12)から、1.44±0.39尾/m<sup>2</sup>(5/26)でピークを迎え、0.01±0.004尾/m<sup>2</sup>(8/17)と推移した(図1)。一方、伊庭内湖では

5月11日より稚魚が採捕され、推定生息密度(±標準誤差)は0.01±0.01尾/m<sup>2</sup>(5/11)から、0.52±0.32尾/m<sup>2</sup>(6/9)でピークを迎え0.02±0.01尾/m<sup>2</sup>(8/18)と推移した(図2)。

採捕禁止となった2017年以降、西の湖ではピーク時の稚魚密度が0.89±0.22尾/m<sup>2</sup>(2018年)から、2.38±0.43尾/m<sup>2</sup>(2019年)の間で推移しており、採捕禁止となる以前の0.46±0.24尾/m<sup>2</sup>(2014年)、0.31±0.24尾/m<sup>2</sup>(2016年)と比較して4年継続して高い生息密度を示した。また、伊庭内湖では流入河川で採捕禁止となる以前から漁業者による自主禁漁の取り組みが行われており、2017年以降も変わらず概ね高い生息密度で推移した。

ホンモロコ資源の増減には様々な事象が影響しているため、ホンモロコの資源管理のためにも今後の資源動向を把握し、委員会指示による効果を正しく評価していく必要がある。

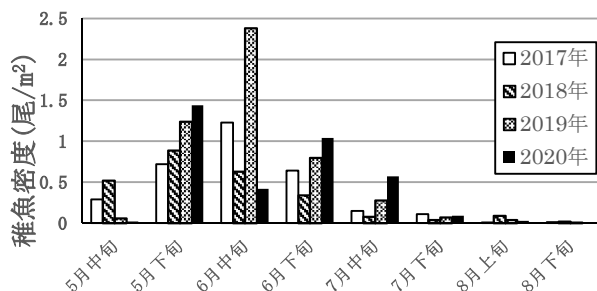


図1 西の湖6地点の推定生息密度(尾/m<sup>2</sup>)

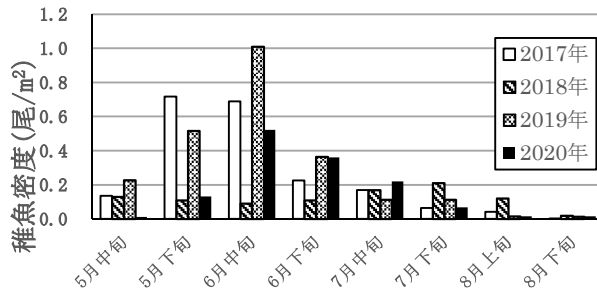


図2 伊庭内湖および大同川8地点の推定生息密度(尾/m<sup>2</sup>)